教職大学院を活用した
学校改善事例集

静岡大学大学院　教育学研究科
教育実践高度化専攻
学校組織開発領域
平成２７年度

刊行によせて

日頃は本教職大学院の諸活動にご理解・ご協力を賜り誠に有難うございます。

今日学校は、大きな岐路に立たされています。新学習指導要領への対応、道徳の教科化、コミュニティ･スクールの拡大、全国学力学習状況調査への対策、小中一貫教育の普及など、ますます多くの改革課題に直面していかなければならない一方で、教員の多くがベテランから新人へと入れ替わる学校内外共に困難な状況に学校現場は置かれています。そうした中で、諸課題に対応しつつどのように教育の質を担保していくか、多くの教育関係者の方々が苦悩し知恵を振り絞ってご尽力いただいているものと思います。

さて、これだけ学校現場が多忙化している中、学校の中核リーダーとして活躍されている教員を本大学院にご派遣いただくからには、大学院研修の成果は、教員個人の力量形成に資するのみならず、広く地域の学校改善に資すべきものと私たちは信じております。

本専攻の学校組織開発領域の大学院カリキュラムは、全体をこの目的に向けて体系化されており、また本年度修了する５名の大学院生もその自覚のもと２年間の研鑽に励んで参りました。

このたび、本事例集を刊行いたしましたのは、大学院研修を学校改善に直結させることを企図したものです。研修成果をより広く学校改善へと還元していくためのヒントとしていただくと同時に、今後の教職大学院派遣者の選考にあたっては、学校現場のニーズと連動させてご計画いただきたいと考え、そのイメージを持っていただく一助としてこの小冊子を作成しました。ご活用いただければ幸いです。

平成 29 年度入学生からは、上記の趣旨を徹底し、大学院研修がより的確に学校改善に繋がるよう「学校等改善支援研究員」制度（巻末資料）を導入する予定です。

未来を生きる子供のため、立場を超えて英知を結集していけるよう、忌憚のないご指導ご鞭撻をいただけましたら幸甚に存じます。

平成 28 年2月 24 日

静岡大学大学院･教育学研究科･教育実践高度化専攻
学校組織開発領域　教員一同

目　　次

Ⅰ．大学院生による学校改善
１．事例Ａ　幼保小の「違い」を「強み」に変えるための「対話」・・・・・・　６

２．事例Ｂ「つなぐ」マネジメントで学校活性化・・・・・・・・・・・・・・・　８

３．事例Ｃ　人口減少問題に対応する「ふるさと志向力」を育むキャリア教育　10

４．事例Ｄ　ポジティブメンタルヘルスによる職場環境改善・・・・・・・・・・　12

５．事例Ｅ　高等学校の特性に合わせたキャリア教育支援・・・・・・・・・・・　14

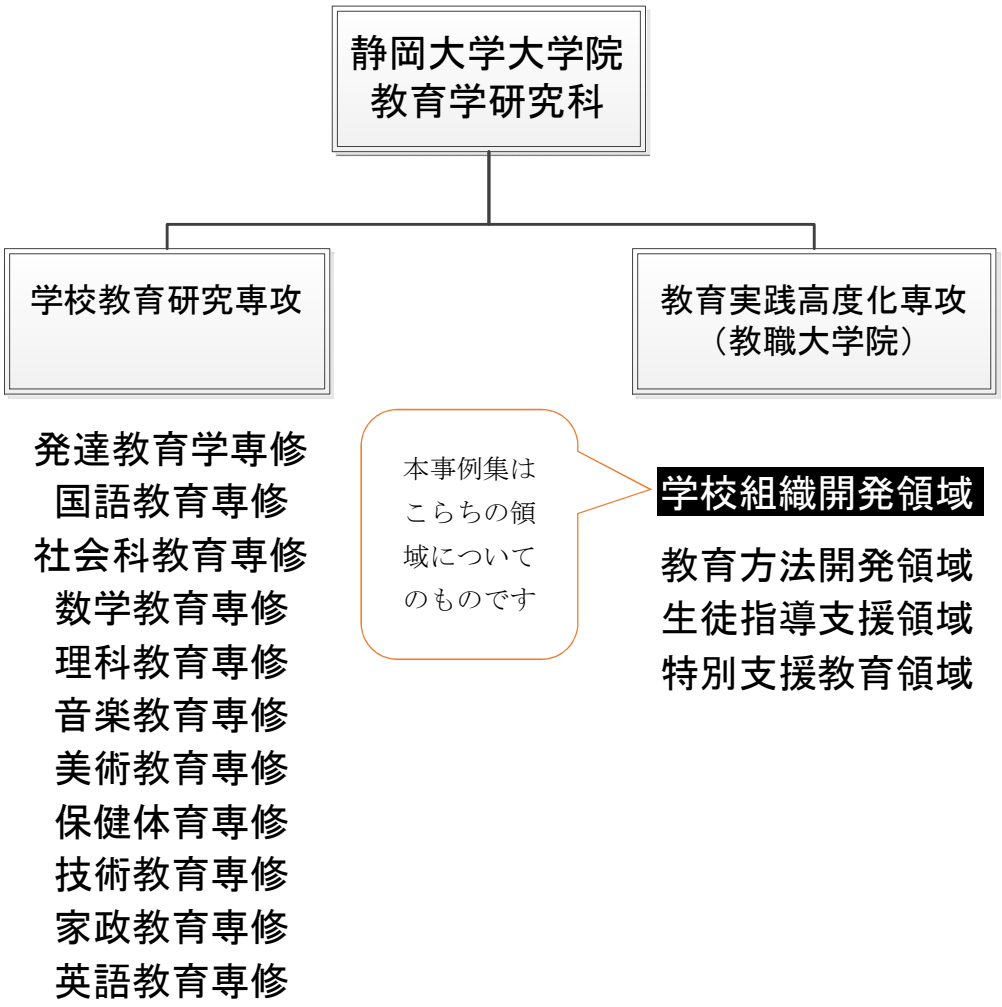
Ⅱ．教員組織による県内学校への支援
１．実践研究ラウンドテーブル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　18

２．「気概塾-Kigai juku」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20

３．個々の教員による学校改善支援活動一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　22

（資料）「学校等改善支援研究員」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・　26

＊本事例集は静岡大学大学院・教育学研究科・教育実践高度化専攻のうち、学校組織開発領域に関するものです。（次ページ図参照）



静岡大学大学院・教育学研究科の組織図

学校組織開発領域　教員一覧

氏　名	専門	連　絡　先
山崎保寿（教授）	カリキュラム・キャリア教育	eyyamaz@ipc.shizuoka.ac.jp ０５４－２３８－４７０１
三ッ谷三善（教授）	教育行政（実務家）	mitsuya.mitsuyoshi@ipc.shizuoka.ac.jp ０５４－２３８－４６１６
武井敦史（教授）	組織開発・リーダーシップ	eatakei@ipc.shizuoka.ac.jp ０５４－２３８－４７０２
渋江かさね（准教授）	成人学習・社会教育	eksibue@ipc.shizuoka.ac.jp ０５４－２３８－４６０２
島田桂吾（講師）	教育行政・教育政策	shimada@shizuoka.ac.jp ０５４－２３８－４７０８
山口久芳（特任教授）	学校経営（実務家）	ehyamag@ipc.shizuoka.ac.jp ０５４－２３８－４７０１

Ⅰ．大学院生による学校改善

１．事例Ａ　幼保小の「違い」を「強み」に変えるための「対話」

三島市立山田小学校　本荘文康

１　テーマの説明

幼保小連携・接続の営みを、様々な「対話」を、様々な「機会」に行うことにより、それぞれの「違い」を「強み」に変え、保育者・教員だけでなく、子どもの育ちを見守る関係者をエンパワーメント（力をつける・元気になる）し、その成果を子どもに還元することを目的として、研究を進めてきました。

２　大学院在学中に行った学校支援

（１）研修における様々な「対話」の提案

三島市教育委員会・三島市社会福祉部子ども保育課及び静岡大学教職大学院との連携により、表１のような研修機会に、様々な「対話」を提案・実践しました。

表１　様々な「対話」

	キャリアデザインシート	カリキュラム・イメージマップ	ラウンドテーブル
	写真１	写真２	
内容	保育者として、自身の力量がどの段階にあるかを分析し、課題を明らかにし、自身がどのように成長したいかを探索し、志を立て、手立てを構築する	幼稚園が組織としてどのように動いているのか、また他機関とどのように関わっているのかを理解するとともに、自園の強みや課題を探る	幼児に関わる福祉・教育関係者が日々の実践を語り聴き合う過程で、相互理解を深め情報を共有するきっかけを提供し、福祉と教育の連携を図る
大学院との連携	幼児教育の制度や歴史について、大学教員が講義をするとともに、教育学部 4 年生（保育者内定）が参加した	大学院教員が、他地区で行った研修を、大学院生（現職派遣）が指導主事から指導を受け、地域の実情に合わせて実施した	複数名の大学院生（現職派遣）と大学院修了生が、各グループでの話し合いのファシリテーター役を担った

静大と共同研修会

三島市　園長候補を育成

写真１　教育新聞（静岡版）,平成 27 年 2 月 9 日

幼保小教諭ら40人

三島で異業種交流会

写真２　教育新聞（静岡版）,平成 27 年 8 月 10 日

（２）大学教員からの情報提供（講義等）「キャリアデザインシート」

・幼稚園のしくみや制度の話は、なかなか聞く機会がないので、とても勉強になりました。【幼稚園】

・自分の今、未来に求められることを見通したり、他の先生の話を聴いたりすることで、自分たちの立場（ミドルリーダー）として求められることを再認識することができました。【幼稚園】

（３）地域・学校の実態に合った研修の提案「カリキュラム・イメージマップ」

・園内だけでなく、地域や外部の方々に支えられたり、理解して頂いたりしているから、”ようちえん”が成り立っているのだと改めて感じました。【幼稚園】

・園の規模や園周辺の環境によって、園の良さや強みが変わっていくことが分かったり、園の弱さ（課題）だと思っている部分も他園から見ると強みになったりしていることもあるのだと感じました。【幼稚園】

（４）大学院生（現職派遣）との関わり「ラウンドテーブル」

・小学校の先生の話を聞いて、幼稚園でやっていることが小学校に上手くつながっているということを知り、とても嬉しく思い、今後保育をしていく上で励みになりました。【幼稚園】

・立場は違っても、子どもの育ちを見守る現場の人間として、交流できたことはとてもよかったです。【小学校】

３　学校改善へのヒント　「教職大学院との連携による研修」

保育者及び教員の資質向上の機会である研修（教育委員会、各校園等）において、研修の目的に応じて、様々な「対話」手法を用いることにより、園・学校の保育・教育活動の改善に供するきっかけを提供することができると考えます。

そのための方策の一つとして、大学教員からの情報提供及び地域・学校の実態に合った研修の提案について、大学院生（現職派遣）との関わり等を通じて、学校・園、教育委員会、教職大学院との協働により、学校改善に資する研修の在り方を考えることができます。

事例Ｂ　「つなぐ」マネジメントで学校活性化

焼津市立焼津西小学校　法月良輔

１　テーマの説明

中央教育審議会教育課程企画特別部会による論点整理(2015,8)では，子どもたちに必要な資質能力を育成するための方策として，アクティブ・ラーニングと並びカリキュラム・マネジメントが取り上げられています。カリキュラムの可視化を視点にＣＭの活用について考えました。

２　大学院在学中に行った学校支援

(1) 事例校であるＡ小学校において，Ａ小学校の強みを活かし，子どもの実態に応じたカリキュラムの開発を目的とした「学年部を核としたカリキュラム・マネジメントの活用」に取り組みました。

(2) 焼津市主幹・教務主任研修会(2015,10)において，静岡大学教職大学院教授，武井敦史とともにカリキュラムの最適化をテーマとした講義を行い，カリキュラム・マネジメントの活用例としてＡ小学校の事例を紹介しました。

３　学校改善へのヒント

(1) 学年部を核としたカリキュラム・マネジメントの活用

①学年部経営の相対的強化

「学年部を核としたカリキュラム・マネジメントの活用」は学年部経営の相対的強化を目的に３つの方向性と６つのバリエーションによって構成されています。学年部経営の相対的強化に向けた各バリエーションの具体的な取り組みについては図１に示す通りであります。

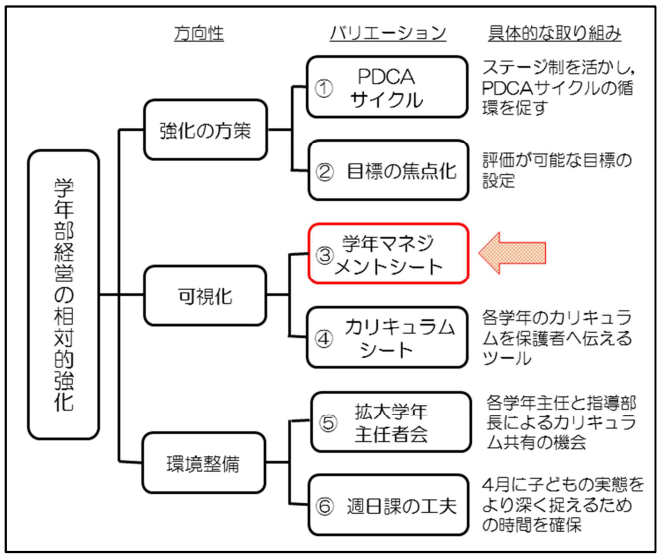


図１　学年部経営の強化に向けた取り組み

②マネジメントシートの開発

「学年マネジメントシート」は各学年のカリキュラムを可視化することで教職員の協働を促し，目標－活動－評価－改善サイクルの循環促進を企図し開発しました。なお，本マネジメントシートは既存の学年経営案にマネジメント機能を加えたものになります（図２）。

重点目標や各指導部の方向性を踏まえ，各ステージの「学年で目指す姿:P」を設定する。目標に対する「具体的な手立て:D」を学年部で開発し，取り組みの成果と課題を「評価・改善:C→A」として共有する。小学校現場で子どもの実態に即した目標の修正や手立ての開発が可能となっています。

③学年マネジメントシート活用の効果

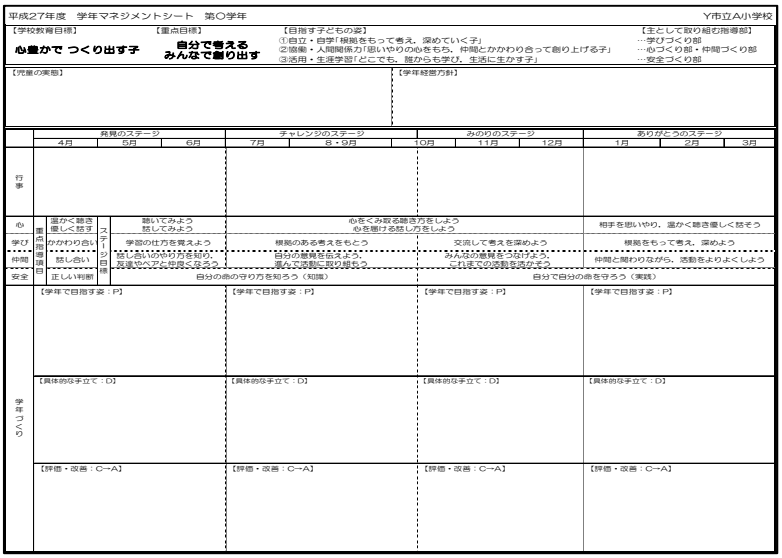
学年マネジメントシートを活用とした効果として，学年経営に次に挙げる３つの「つながり」をもたらすことが示唆されています。

目標と教育活動のつながり

学年マネジメントシートの活用によって，学年の職員に共有された明確な評価基準による評価が可能になった。評価の整合性は，子どもの実態に即した目標設定や手立ての開発を促し PDCA サイクルの充実につながる。

教師同士のつながり

学年マネジメントシートの活用は，教師の同僚性を醸成し，協働学習の場として機能していると言える。A小学校の事例では，カリキュラム開発を通して若手育成の機会となっている。



平成27年度　学年マネジメントシート　第○学年　　Y市立A小学校

【学校教育目標】心豊かで つくり出す子

【重点目標】自分で考える みんなで創り出す

【目指す子どもの姿】①自立・自学「根拠をもって考え，深めていく子」 ②協働・人間関係力「思いやりの心をもち，仲間とかかわり合って創り上げる子」 ③活用・生涯学習「どこでも，誰からも学び，生活に生かす子」

【主として取り組む指導部】…学びづくり部 …心づくり部・仲間づくり部 …安全づくり部

【児童の実態】

【学年経営方針】

	発見のステージ			チャレンジのステージ			みのりのステージ			ありがとうのステージ		
	4月	5月	6月	7月	8・9月		10月	11月	12月	1月	2月	3月
行事												
心	重点指導目標 温かく聴き優しく話す	フリー目標 聴いてみよう 話してみよう		心をくみ取る聴き方をしよう 心を届ける話し方をしよう						相手を思いやり，温かく聴き優しく話そう		
学び	かかわり合い	学習の仕方を覚えよう		根拠のある考えをもとう			交流して考えを深めよう			根拠をもって考え，深めよう		
仲間	話し合い	話し合いのやり方を知り，共通やペアに慣れる		自分の意見を出そう 場合で活動に取り組もう			みんなの意見をつなげよう これまでの活動を高めよう			仲間と関わりながら，活動をよりよくしよう		
安全	正しい判断	自分の命の守り方を知ろう（知識）					自分で自分の命を守ろう（実践）					
学年でつくる	【学年で目指す姿：P】			【学年で目指す姿：P】			【学年で目指す姿：P】			【学年で目指す姿：P】		
	【具体的な手立て：D】			【具体的な手立て：D】			【具体的な手立て：D】			【具体的な手立て：D】		
	【評価・改善：C→A】			【評価・改善：C→A】			【評価・改善：C→A】			【評価・改善：C→A】		

図２　学年マネジメントシート

保護者とのつながり

学年マネジメントシートを基に作成したカリキュラムシートを通して，より詳細なカリキュラムを保護者へ提示することが可能となった。学校と保護者の協働を促し，学校評価の充実等の効果が得られる。

４　本活用モデルの応用可能性

焼津市主幹・教務主任研修会では本活用モデルの様々な応用可能性が示されました。各学校の強みや課題に合わせ本モデルの応用が可能であるとされています。また，同研修会からは本活用モデルの期待される効果として「PDCA サイクルの充実」「若手職員の育成」「望ましい職員風土の醸成」が示唆されました。

事例Ｃ　人口減少問題に対応する

「ふるさと志向力」を育むキャリア教育

菊川市立菊川西中学校　髙塚和弘

１　テーマの説明

教育を取り巻く社会の問題の中でもとりわけ喫緊なものは、人口減少問題です。日本の人口は 30 年後には１億人を割り込むと推測されています。また静岡県においては人口流出が全国で２年連続ワースト２であるという事実を受け、人口流出も合わせて考えるべき問題となっています。

本プログラムは、それらの問題に対し、教育からのアプローチとして、学校、行政、企業が連携して行うキャリア教育を企画したものです。そのねらいは、人口減少の実態や地元の良さや課題を学ぶ中で、生徒が地元で働き、暮らす視点を身に付けることにあります。

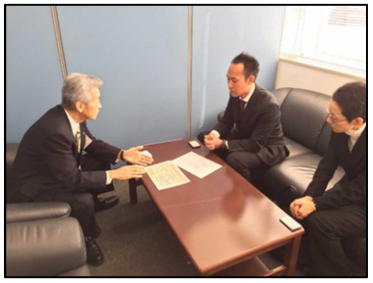
人口減対策 鍵は「ふるさと志向力」
「菊川で働く」中学生に提案
地元企業が説明会
官民一体で企画

出典：静岡新聞（平成 27 年５月 11 日夕刊）

２　大学院在学中に行った学校支援

①　プログラム実施に向けた関係各所へのアプローチ

本プログラムを実施するにあたり、「行政や企業を巻き込む上で、市長の了解を得ることが必要である」との助言を、静岡大学教職大学院の山口久芳先生から受け、先生とともに、菊川市長への提案をさせていただきました。市長は、以前から人口減少問題に関心を持っておられ、筆者が提案する企画の必要性を感じていたことをお話しいただき、菊川市の協力を得られることとなりました。



その後、山口先生、静岡大学教職大学院渋江かさね先生の協力を得て、市内企業への依頼を行いました。結果、13 企業がキャリア教育に協力していただけることになりました。

「ふるさと志向力」を育む
互いがプラスになる取り組み
思いを伝えられる貴重な機会

②　実践の様子

プログラムは、中学校２年生を対象に、事前学習、本時、事後学習で実施しました。

事前学習では、筆者が講義を行いました。人口減少の状況について、日本、静岡県、菊川市の現状のデータを用いながら、人口減少の実態とその問題点を示すとともに、人口減少が起こる理由について理解を促す内容としました。また、事前に生徒の定住志向やふるさとへの愛着に関する実態調査を行い、結果をグラフで示すことで、調査結果と人口減少の実態を照らし合わせて考えられるように工夫しました。

出典：「広報菊川」（Vol.215, 平成 27 年７月 16 日発行）

本時は、市内企業 13 社で働く方々を招き、生徒と直接触れ合えるようにしました。会場である体育館を 13 のブースに区切り、各企業がブースで 15 分のプレゼンテーションを３回実施します。企業には、Ａ４で１枚裏表の説明資料の準備を依頼し、これを事前に生徒に配布しました。プレゼンテーション終了後に、20 分のフリータイムを設け、会場にいる生徒、企業、教員が自由に意見交換できるようにしました。

事後学習が学級ごとで行い、筆者が作成した授業案を用いて、各学級担任に授業者を務めてもらいました。生徒には事前に、事前学習や本時の学習を通して学んだことを、菊川市で働く良さと課題という視点でまとめてきてもらい、①意見を生活班で共有し、班員から出た意見を、付箋を使って分類し、題名をつけて画用紙にまとめる、②班でまとめた意見を新たに編成した小グループで話し合い、菊川市で働く良さ、自己実現することの良さを、学級全体で共有することを行いました。

出典：「広報菊川」（Vol. 215, 平成 27 年７月 16 日発行）

３　ふるさと志向力を育むキャリア教育の今後の発展

①　人口減少問題への教育現場からのアプローチ

人口減少問題は、菊川市のみならず、地方都市にとっての喫緊の課題となっています。本プログラムは、人口減少問題をテーマとすることで、学校、地域、行政、企業のそれぞれにとって関心の高いプログラムとなりました。その結果、生徒に菊川市で働く方々と直接触れ合う機会が実現し、生徒に企業の生の声を届けることができました。今後は、この関係性を生かし、他の教育活動においても学校と地域との連携協力体制が期待できます。

②　キャリア教育の系統的なカリキュラムとして実施

本年度は、中学校２年生のキャリア教育に位置付け、その後の職業講話、職業体験につながる試みとなりました。今後は、系統的なカリキュラムに位置付けた上で実施するとともに、「ふるさと志向力」を菊川市のキャリア教育における身に付けさせたい力の一つとし、ふるさと志向力で貫くキャリア教育カリキュラムを作成し、菊川市ならではの魅力ある学習プログラムを展開することができます。今後は、各市町の実態に合わせ、様々な地域で実施することも可能となります。本年度は３市町への情報提供を行いました。

③　菊川市のゆるやかな教育コミュニティの構築

生徒、教員、行政、企業が参加してプログラムを実施したことで、これまでは接点を持ちづらかった教育関係者の横のつながりをつくるきっかけとなりました。今後は、学校の教育活動に留まらず、関係者同士をつなぐ場を設定し、ゆるやかなつながりを継続することで、菊川市の教育コミュニティを形成することが可能となります。社会の急速な変化の中で求められている、社会総がかりで子どもを育むための、地域とともにある学校づくりへのつながりに期待できます。

事例Ｄ　ポジティブメンタルヘルスによる職場環境改善

磐田市立豊田中学校　古山浩志

１　テーマの説明

教職員のメンタルヘルスは喫緊の課題です。それを解決するためには、予防的な取組が重要であるとされ、ストレスチェックやメンタルヘルス講習会等、メンタルヘルス対策は立てられています。しかし、多忙を極めた学校現場では、メンタルヘルス対策を実施する時間を生み出すことにも苦慮しています。そこで、実施しやすいメンタルヘルス対策として、ポジティブメンタルヘルスを提案しました。尚、ポジティブメンタルヘルスは、一部のメンタルヘルス不調者を対象としたものではなく、全職員が生き生きと働くことができるようにする取組であるため、学校全体で明るく取り組むことができます。

２　大学院在学中に行った学校支援

（１）働きやすい職場環境づくりのための環境整備を実施

取組①：職員室の一角にある体育用具置き場の整理整頓をし、ラベリングをしたことによって、児童および職員が使用しやすくなりました。

取組②：裏面使用可能な用紙を再利用する仕組みを提供しました。ミスプリントされた面や見る必要のない面に「裏面使用」の印刷をすることで、㋐どちらが不要な面か分かる、㋑裏面使用していることが分かる、㋒不要な面の印刷内容が隠れる（見えにくくなる）ため、裏面が使える用紙を有効活用できるようになりました。

取組③：運動場に運動会やリレー等で使用するラインを引くためのポイントを作成しました。メジャーを使用することなく、一人でもラインを引くことができるようになりました。

（２）採用から間もない教員へのサポート

教職経験 2 年未満の教員を対象に、週 1 日、学級経営や教科指導を参観し、教材研究の時間や放課後に対話をしてサポートしました。

（３）教職員・生徒・保護者による冊子の作成

教職員・生徒・保護者から、自分自身の支えになった言葉を募集し、一冊の冊子にまとめました。保護者へのプレゼンや冊子の編集・製本作業など、生徒会が中心になって取り組んだ活動のサポートをしました。

（4）保護者による座談会の開催

有志の保護者が学校に集まり、子育てについてグループワークを行いました。企画・運営やグループワークの情報提供に対してサポートをしました。今年度は、年間で 3 回開催しました。

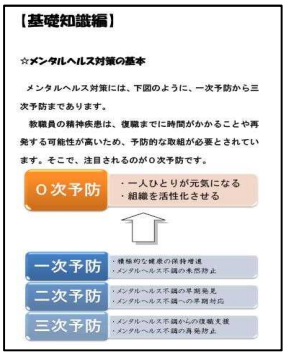
（5）メンタルヘルスの情報提供

怒り感情のコントロールについて要点をまとめ、「アンガーマネジメント通信」として教職員に配布しました。児童生徒に対して授業を行ったり、保護者を対象に講習を行ったりしました。

3　学校改善へのヒント

各校でポジティブメンタルヘルスを導入するための手引書を作成しました。メンタルヘルス対策の実施計画を作成するためのツールです。これは、メンタルヘルス対策だけではなく、教育活動の振り返りや精選のためにも使うことができます。

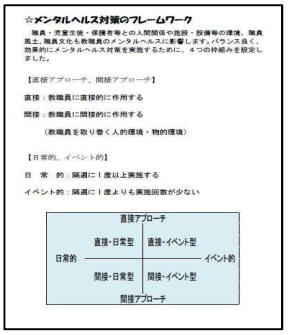
☆『ポジティブメンタルヘルス導入の手引き』☆



・「基礎知識編」は、メンタルヘルス対策の基本方針を簡潔にまとめてあります。「ポジティブメンタルヘルス」の概要についても記載されています。

・「実践編」は、各校でポジティブメンタルヘルスを実施するために、実施計画を作成します。

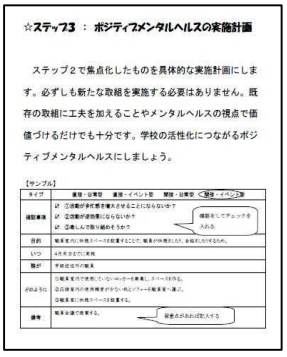
①ステップ１では、各校で実施しているメンタルヘルス対策を整理します。予め項目を挙げてあり、「○・？・☆」を感覚的に記入するだけです。



②ステップ２では、実施してみたいポジティブメンタルヘルスの活動を絞り込みます。

③ステップ３では、実施計画の作成をします。「いつ・誰が・どのように」を記入しますが、ステップ２までにイメージができているので、簡単に作成できます。

ワークシートが付いているので、ステップ１～３の手順に従ってワークを進めれば、実施計画が作成できるようになっています。



事例Ｅ　高等学校の特性に合わせたキャリア教育支援

静岡県立駿河総合高等学校　水田忍美

事例Ｅ－1　生徒のキャリア意識に関する調査

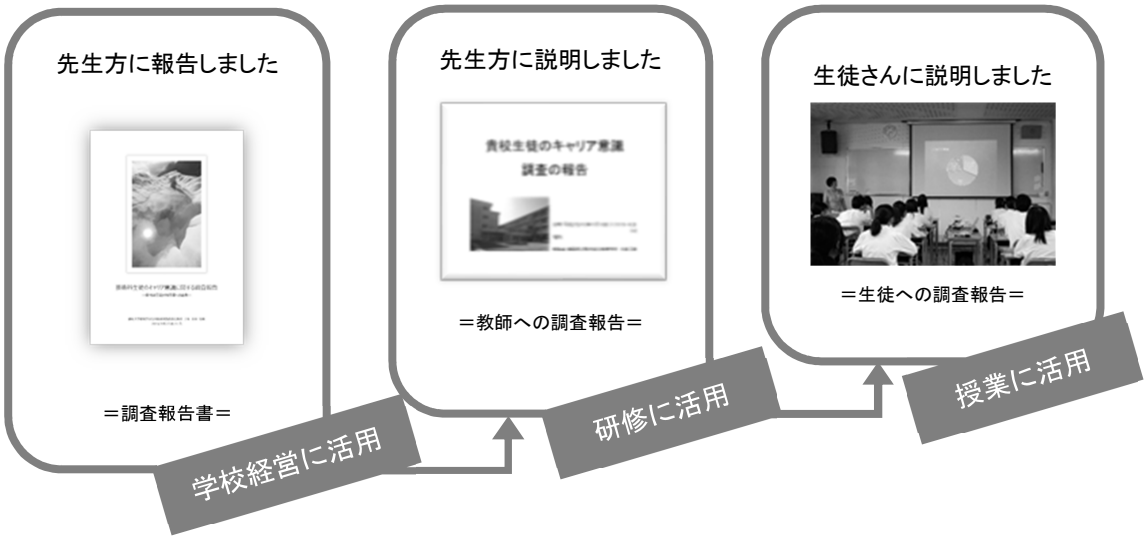
１　テーマの説明

高校への進学動機や現状のキャリア意識を明らかにするために、生徒のキャリア意識に関する調査を質問紙により実施しました。

２　大学院在学中に行った学校支援

調査で得られた回答を大学教員の指導の下、統計やテキストマイニング等を使用して数量的・質的に分析しました。そして、大学教員と共に考察し、学年による比較等により、調査校生徒のキャリア意識を明らかにしました。

また、この生徒調査から得た結果と考察を学校で説明しました。



３　学校活用へのヒント

調査結果と考察により、学校における現在のキャリア教育の課題が明確になります。そしてこの調査報告書は、客観的資料として、キャリア教育の一層の充実のためのプランニングの際、参考にすることができます。

事例Ｅ－2　学校の特性に合わせたキャリア教育支援

１　テーマの説明

学校の特性に合わせて、キャリア教育の支援を行ないました。

２　大学院在学中に行った学校支援

学校の特性に合わせたキャリア教育の支援を、大学教員と共に考えました。そして、「キャリアモデルを通して、自分のキャリアへの見通しを持ち、自分に適した職業を探索などの自己実現的な意欲につなげる」という方法を用いることとしました。

そこでまず、生徒がキャリア形成に見通しを持つことを目的として、卒業生のキャリアモデルを集め、冊子を作成しました。その上で、大学教員の助言のもとクラス担任と共に、この冊子を用いたキャリア教育活動を企画し、実施しました。

① 個人作業

② グループ活動

③ 意見交換・共有

④ グループワーク紙

＜生徒の感想＞

今日の活動は、久々に気分が高揚した時間でした。

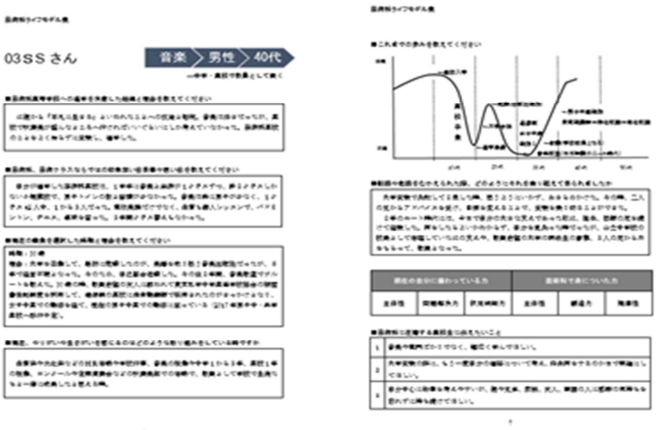
僕たちが、ずっとかけて欲しかった言葉とたくさん出会えました。

➡事後検証では、この活動により生徒に「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」が身についたことが明らかとなっています。

３　学校での活用のヒント

その後、卒業生のキャリアモデルを集めた冊子は、生徒の手の届くところに置き、生徒が見たい時に見ることができる資料としてクラスに配架しました。

また、この活動で作成したグループワーク紙は、保護者会などでの活用も可能です。



卒業生のキャリアモデル

Ⅱ．教員組織による県内学校への支援

１．「実践研究ラウンドテーブル in 静岡」について

１　実践研究ラウンドテーブルとは

実践研究ラウンドテーブルとは、少人数（６名程度）で「互いの実践について、じっくり語り、聴き取り、考え合う」ことを通して、実践について学びあう方法であり、場である。「学校拠点方式」の教師教育に長年取り組んでいる福井大学が、「重要な支柱」のひとつとして展開してきました。その特徴のひとつは、学校教育に限らず、さまざまな領域や立場の人が地域を超えて集い、語られる実践に興味をもって聴きあって学びあう点です。

静岡大学では、2013 年度より「実践研究ラウンドテーブル in 静岡」（以下、静岡ラウンド）を年１回開催しており、今回で３回目となります。開催の経緯は下記のとおりである。教員の養成と研修に関し、大学は主に前者を引き受けてきた。その状態を脱し、教育委員会と連携して「養成・研修統合型の教師教育システム」を構築する布石として始めた試みのひとつが、静岡ラウンドです。学校マネジメント力の育成を志向する教員だけではなく、その他教員、教育委員会職員、大学教員、大学生、社会教育関係者など、子どもの学びや育ちに関わりを持つ人びとを対象としています。このような人たちが取り組みを報告し合うことを通して、互いの取り組みへの理解を深めると共に、ゆるやかなネットワーク形成の機会を提供することを意図しています。

２　実践研究ラウンドテーブル in 静岡 2015 の概要

今回の静大ラウンドは、2015 年 11 月 23 日（月）10 時から 16 時に、ホテルアソシア静岡で実施しました。主催は、静岡大学教育学部、教育学研究科附属教員養成・研修高度化推進センター（以下、高度化センター）です。福井大学教職大学院、教師教育改革コラボレーションとの共催で、静岡県教育委員会、静岡市教育委員会、浜松市教育委員会の後援を得た。参加者は 89 名でした。内訳は、現職教員（現職院生含む）19 名、学校管理職４名、研究者 38 名、社会教育関係４名、病院・看護関係１名、行政職・指導主事 17 名、学部生３名、大学院生１名、その他２名です。

プログラムの流れは、下記の通りです。①オープニングセッション［10：00～10：20］、②ミニ講演「『チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について』（中間まとめ）の背景と展望」講師：藤原文雄氏（国立教育政策研究所）［10：20～11：00］、③ラウンドテーブル報告Ⅰ（自己紹介 10 分、報告 40 分、意見交換 30 分）［11：10～12：30］、④ラウンドテーブル報告Ⅱ（報告 40 分、意見交換 30 分）［13：30～14：50］、⑤ミニシンポジウム「‘Act Globally，Nationally & Locally’を志向した教員養成の高度化をめざして――実践研究ラウンドテーブル in 静岡　３年間の軌跡」シンポジスト：梅澤収氏（静岡大学教育学研究科附属教員養成・研修高度化推進センター長、静岡大学教育学部前学部長）、松木健一氏（福井大学教職大学院教授）［13：30～14：50］、⑥クロージングセッション［15：55～16：00］。このうち③と④については、14 のグループで実施しました。各グループに報告者を２名配置した。教職大学院学校組織開発領域の中では、２年生５名がアクションリサーチ等について報告を、学校組織開発領域教員の山口久芳氏が気概塾について報告しました（次頁表参照）。

・古山浩志（静岡大学教職大学院２年／磐田市立豊田中学校）「人とのつながりで成長してきた教員人生」
・髙塚和弘（静岡大学教職大学院２年／菊川市立菊川西中学校）「学校が地域とともに子どもたちを育てるための関係性の形成に向けて―教職大学院生としての実践を通して―」
・法月良輔（静岡大学教職大学院２年／焼津市立焼津西小学校）「カリキュラムマネジメントの一事例―学年部経営に主眼を置いた実践―」
・本荘文康（静岡大学教職大学院２年／三島市立山田小学校）「幼小連携における『相互理解』とその先にあるもの―アクションリサーチを通して―」
・水田忍美（静岡大学教職大学院２年／静岡県立駿河総合高等学校）「教職大学院での学びを振り返り、これからにつなぐ」

当日の様子

４　今後に向けて

シンポジウムの際に静岡市教育長の髙木雅宏氏より、以下のコメントをいただいた。①ラウンドテーブルは日頃の教職大学院の授業につながっているか、②ラウンドテーブルの第１回目から第３回目までのつながりという点はどのようになっているか。これらのコメントを基に、「教員養成の高度化」の一環としてのラウンドテーブルの今後を考えたい。

付記：今回の静大ラウンドの企画は、梅澤収高度化センター長のもと、渋江かさね、島田桂吾（以上、教職大学院学校組織開発領域／高度化センター兼任センター員）、中村美智太郎（教育学部／高度化センター専任センター員）、三ッ谷三善（教職大学院学校組織開発領域／高度化センター副センター長）、田中奈津子（福井大学コーディネーターリサーチャー）でおこなった。静大ラウンド当日は、教育学部および教職大学院の有志の教員計 10 名の協力を得た。

２．「気概塾-Kigai juku」について

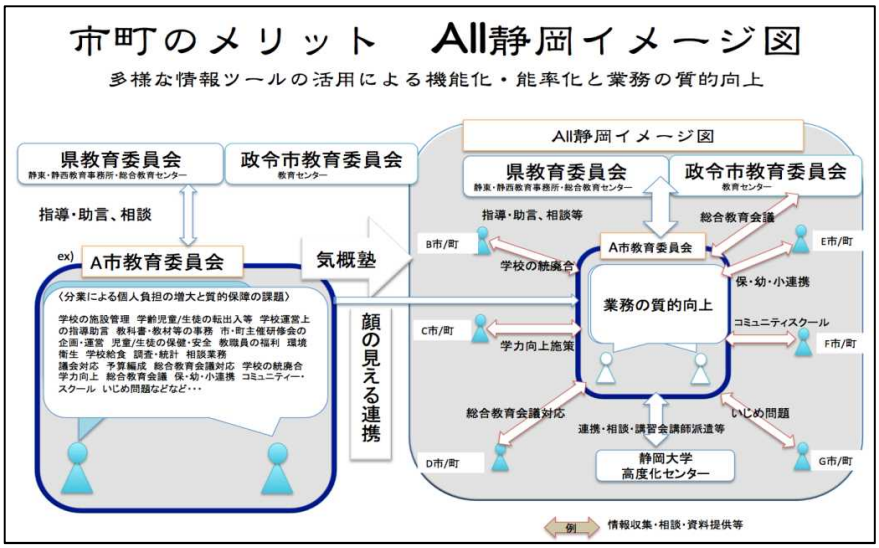
平成２７年度、静岡大学教育学研究科附属教員養成・研修高度化センターは、静岡県教育委員会、静岡市教育委員会、浜松市教育員会並びに各市町教育委員会のご理解とご支援をいただき「気概塾」を発足させました。以下、その一年の歩みを報告します。

１　目的

① 静岡県及び各市町の教育をリードする気概と志を持ち高度な教育実践力を身につけたリーダーの育成
② 21 世紀の地域教育を担う学校づくりに参画する力量の育成
③ 教育委員会の運営に関する情報交換
④ 教育委員会･学校改善に資する人的ネットワークの構築
⑤ 県教育委員会、政令市･市町教育委員会、大学の連携によるに対応した先進的で創造的な学校教育の推進

２　塾発足の背景

現在においても様々な課題が山積している教育界は、今後は更に厳しい状況が予想されます。このような時代であるからこそ、子ども達に夢と希望を育む学校経営の担い手であるリーダーは、地元の教育をリードする気概と高い志を持ち高度な教育実践力を身につけなければならないと考えます。



さらに、これからのリーダーは人的ネットワークを駆使し自らの教育実践を広い視野で見つめ、構築する柔軟性・創造性や編集力が求められる。本塾は、各市町の指導主事同士の顔の見える連携による人的ネットワークの構築と高度な教育実践の担い手としての幅広い教養と知見を身につける場となることを願って設立ました。（図は各市町の連携のイメージ図）

３　講座内容

講座は、４回の短期日程であることから、１講座約６０分のミニ講座とし講座数を増やすとともに「顔の見える連携」を意図しグループワークを毎回取り入れました。次に示すのは講座内容と講師名です。開校式は山崎（前センター長）が、閉校式は梅澤（センター

長）が講話を行いました。

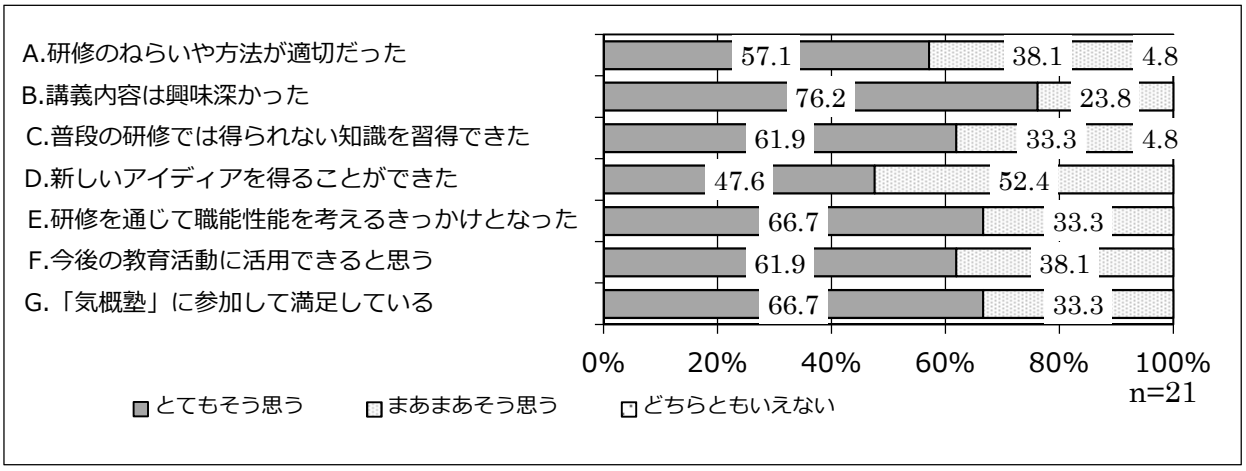
１回目〈４月３０日（木)〉 JR 静岡駅ビル（13:30-17:00）	
講座１　「指導主事に期待すること」	林剛史静岡県教委義務教育課長
講座２　「学校訪問の視点とふるさと IQ」	山口久芳
２回目〈８月２６日（水)〉浜松アクトシティー（9:30-16:00）	
講座３　「不祥事に思う」	渥美利之弁護士（浜松市教育委員）
講座４　「学校の不祥事対応指導について」	杉山真也浜松市教職員課副参事
講座５　「教育政策の最新事情」	島田　桂吾
講座６　「リーダーシップの哲学」	中村美知太郎
３回目〈１１月２８日〉（土）〉三島市日本大学国際関係学部　(9:30-16:00)	
講座７　「特別支援教育の現状と課題」	香野　毅
講座８　「学習科学から見た学びの仕組みと次期学習指導要領の授業設計」	益川　弘如
講座９　「教育委員会制度」	三ッ谷三善
４回目〈１月２９日（金)〉静岡市ホテルアソシア（13:30-16:30）	
講座１０「これからの学校と求められるリーダーシップ」武井敦史	

４　〈成果と課題〉

1)　受講者数

第１回２５人、第２回３１人、第３回４４人、第４回２３人、のべ１２３人

2)　参加者のアンケート結果から　（速報値：第４回参加者のみ詳細は後日集計予定）



3)　課題

- 幅広い知見を得る教養的なプログラムにするか、あるテーマに沿った全4回のプログラムに一貫性を持たせるかが課題です。
- 本塾の趣旨をさらに反映させ、企画段階から県教委や政令市の参画並びに他大学との連携をいかに図るかが今後の課題です。
- 伊豆地区の受講者が参加しやすい工夫をいかに図るかが課題です。

３．個々の教員による学校改善支援活動一覧

Ａ．校内研修、学校関連委員等（東→西順）

- 富士市立南小学校　訪問指導（島田）
- 静岡学園高等学校　学校評議員（山﨑）
- 静岡県立清水特別支援学校　学校評議員会（武井・アドバイザー）
- 静岡県立清水特別支援学校　校内研修講師（武井・「コミュニティを活かした特別支援学校づくりを考える」）
- 静岡県立静岡中央高等学校　学校評議員（三ツ谷・委員）
- 静岡県立中央特別支援学校　学校評議員・研修講師（武井・「学校評価の活用について」）
- 静岡県立榛原高等学校　校内研修講師（山口・「将来の地域リーダーを目指したキャリア教育の実践」）
- 焼津市立大井川中学校　研究顧問（山﨑「熱中がとまらない生徒の姿と授業の条件を考える」焼津市教育委員会研究指定校）
- 静岡県立小笠高等学校　学校評議員（山﨑）
- 御前崎市浜岡中学校区　スクラムスクール運営協議会（島田　委員）
- 掛川市立栄川中学校　住民参加型キャリア教育ワークショップ企画運営（山﨑「中学生の夢づくり講座」）
- 静岡県立藤枝特別支援学校　校内研修講師（武井・「学年主任のための学校組織マネジメント」）
- 静岡県立掛川西高等学校　学校評議員（山﨑）
- 袋井市立山名小学校　校内研修講師（山口・「教師の表現力を高める」）
- 磐田市立城山中学校　学校運営協議会委員（武井）
- 磐田市とよおか学府　幼小中一貫教育合同研修会及び学府協議会講師（武井・「これからのとよおか学府の小中一貫教育の方向性」）
- 磐田市とよおか学府　とよおかっ子委員会アドバイザー（武井）
- 磐田市竜洋学府　保幼小中一貫教育推進委員会（武井・委員長・研修講師「これからの竜洋学府のために」）
- 西遠女子学園中学校・高等学校　校内研修顧問・講師（山﨑「研究授業の分析と今後の展望」）

Ｂ．教育センター研修等

静岡県

- 静岡県教育委員会　教科等指導リーダー育成事業講師（山﨑「中堅教員の役割と今後への期待」於静岡県総合教育センター）
- 静岡県教育委員会　新任管理職研修（高・特）講師（山﨑「学校組織マネジメントの要点―新任管理職に必須の組織マネジメント―」於静岡県総合教育センター）
- 静岡県総合教育センター　小・中学校キャリア教育基礎研修講師（山﨑「キャリ

ア教育の基本理念と今日的な課題」）

- 静岡県総合教育センター　「新任校長研修（小・中）」講師（武井・「近未来の学校教育と校長のリーダーシップ」）
- 静岡県総合教育センター　「マネジメント研修」講師（武井・「組織マネジメント」）
- 静岡県総合教育センター　「マネジメント研修」講師（山口・「講評及びスピーチ論」）
- 静岡県特別支援学校校長会　研究会講師　（武井・「特別支援学校におけるこれからの学校経営　ー『組織マネジメント』より『経営』を」）
- 静岡県総合教育センター「所員研修」講師（2 月 5 日、島田・「教育政策のとらえ方」）

静岡市・浜松市

- 静岡市中学校校長会　研究会講師（武井・「時代を担う学校管理職の育成」）
- 浜松市女性管理職研修会（８の会）　講師（山口・「校長・教頭・女性教師の quality を高める」）
- 浜松市校長会教育課程委員会　講師（武井・「小中一貫教育の現状と展望」）
- 浜松市教育研修会教務主任部研修会　講師（武井・「これからの学校教育と主幹教諭・教務主任のリーダーシップ」）

県内市町（東→西順）

- 駿東校長会全体研修会　講師（山口・「観を鍛える」）
- 富士市教育プラザ「マイスター研修会」　講師（武井・「若手教員の成長とその支援」）
- 富士市教育プラザ「推進員・中堅教員研修会」　講師（山口・「これからのリーダーのあり方」）
- 富士市教育プラザ「中堅教員研修」　講師（島田・「教育改革の手法」）
- 焼津市主幹教諭・教務主任研修　講師（武井・「学校の現在と主幹教諭・教務主任のリーダーシップ」）
- 志太教育研究集会　講師（山口・「子どもに笑顔・元気を与える生徒指導」）
- 藤枝市こころの教育講演会　講師（山口・「今こそ　親子の信頼関係づくり」）
- 藤枝市小中一貫教育シンポジウム　基調講演（武井・「今、なぜ小中一貫教育か」）
- 島田市ペアレントサポーター定例会　講師（山口・「就学前教育の大切さと子育て」）
- 島田市小中生徒指導研修会　講師（山口・「閉じるな　ひらけ」）
- 島田市子育て支援ネットワーク講演会　講師（山口・「子どもの最新事情と体験的叫育論」）
- 小笠地区校長会全体研修会　講師（山口・「教育の今と校長の役割」）
- 菊川市教務主任研修会　講師（山口・「魅力ある教育課程をどう編成するか」）
- 菊川市学校支援地域ボランティア研修会（講師・渋江）

- 菊川市幼児施設連絡会全体研修　講師（山口・「最新の教育事情-AKB48 と最近のこども事情-」）
- 磐周地区公立小中学校教頭会研究大会　講師（武井・「変動期の学校とスクールリーダーの経営戦略」）

C．各種委員会、教育委員会関連活動等

静岡県

- 静岡県教育委員会　しずおか型コミュニティ・スクール推進会議（山﨑・委員長）
- 静岡県史編纂特別調査委員（山﨑）
- 静岡県スーパーサイエンスハイスクール運営指導委員会（山﨑・委員長）
- 静岡県教育委員会　地域とともにある学校づくり推進フォーラム（山﨑・コーディネーター）
- 静岡県教育委員会事務の点検・評価　アドバイザー会議（武井・アドバイザー）
- 静岡県中学校夜間学級等検討委員会（武井・委員長）
- 静岡県総合教育センター総務企画課　生涯学習推進室（山崎、渋江、島田・研究顧問）

静岡市・浜松市

- 静岡市小中一貫教員在り方協議会（武井・委員）
- 静岡市教育委員会点検評価（武井・外部有識者）
- 静岡市社会教育委員(渋江)
- 静岡市生涯学習推進審議会（委員・渋江）
- 静岡市放課後児童対策事業運営委員会（島田・委員）
- はままつ人づくり未来プラン検討委員会専門委員（島田・委員）
- はままつの教育推進会議専門委員（島田・委員）

県内市町（東→西順）

- 富士市教育委員会自己点検評価に関する外部検討委員会（武井・委員長）
- 富士市教育振興基本計画後期実施計画策定委員会委員（武井・委員長）
- 吉田町教育推進委員会（島田・委員長）
- 吉田町教育委員会自己点検評価に関する外部検討委員会（島田・外部有識者）
- 島田市立小学校及び中学校の在り方検討委員会委員（武井・委員長）
- 小笠地区社会教育委員研修会講師（山﨑保寿「協働のまちづくり･豊かな地域づくりを展望する」）
- 菊川警察署協議会（山口・協議会会長）
- 菊川市総合計画審議会（山口・委員）
- 御前崎市スクラムスクール運営協議会（山口・アドバイザー）
- 御前崎市・牧之原市教育委員会評価（山﨑・外部有識者）
- 掛川市教育委員会評価委員会（山﨑・委員長）
- 掛川市・三島市いじめ防止対策委員会（山﨑・委員長）

- 掛川市放課後等教育支援研究委員会（武井・委員長）
- 磐田市新たな学校づくり研究会（武井・渋江・委員）

Ｄ．その他各種講演等（東→西順）

- 静岡県教職員組合　教育研究静岡集会　アドバイザー（武井・「自立的活動」）
- 静岡大学教育学部附属浜松小・中学校同窓会総会（山﨑「浜松師範学校創立百周年歴史と意義」）11/14
- 静岡南中学校区青少年健全育成会総会講演　講師（山口・「親として　今　子どもたちに為すべきこと」）
- 静岡市立大谷小学校 PTA 講演　講師（山口・「小学生の親として　今　子どもたちにできること」）
- 藤枝市立高洲中学校 PTA 講演会　講師（山口・「中学生の親として今なすべきこと」）
- 菊川市議会講演会　講師（山口・「教育の最新事情」）
- 菊川市双葉保育園 PTA 講演会　講師（山口・「１０歳までの子育ての大切さ」）
- 掛川市立西山口小学校 PTA 講演会　講師（山口・「親子の信頼関係を築く」）
- 掛川市立城東中学校 PTA 講演会　講師（山口・「中学生の親として今なすべきこと」）

（資料）「学校等改善支援研究員」の導入について

このたび教育実践高度化専攻に開設されている４領域のうち、学校組織開発領域において、教育委員会との申し合わせの上で、「学校等改善支援研究員」を導入することといたしました。「学校等改善支援研究員」とは、教職大学院での実習が学校改善に実質的に寄与することを前提に、静岡大学と静岡県教育委員会・静岡市教育委員会・浜松市教育委員会の４機関の申し合わせの上で使用している現職派遣大学院生の呼称です。

「学校等改善支援研究員」は静岡県下における現職教員の派遣に際し、派遣される大学院生を「学校等改善支援研究員」と位置づけることで、①派遣教員の決定、②大学院派遣期間中の学校への貢献、③研修内容の修了後の学校現場への還元を、円滑かつ効果的にするためのものです。（次ページの比較イメージをご参照下さい）

「学校等改善支援研究員」は、特定の職位や校務分掌上の位置づけを意味するものではありません。また、このしくみは学校人事・学校運営等のあり方や、学校内外の権限関係に影響を与えるものではありませんので、制度の大枠に改変を加えることなく実現が可能です。

具体的には大学院生の入学試験時に「学校等改善支援研究員　受入承諾書」の提出が必要になります。受験生は大学院の入学願書提出の際、派遣元の教育委員会と打ち合わせをして、研究テーマを県や市町の重点施策とすりあわせ、教育委員会からのミッションを携えて入学を志願することになります。

このしくみにより、期待される効果は以下の４点です。

＊教育実践高度化専攻学校組織開発領域を第一希望とする受験生のみ、所属校を設置している教員委員会の教育長に承諾を受けた上で提出して下さい。

平成　　年　　月　　日

学校等改善支援研究員　受入承諾書

静岡大学大学院　教育学研究科長殿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　教育長

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　職印

（所属校名）　　（受験者氏名）

本市（県・町）の職員である＿＿＿＿＿＿＿＿学校教諭＿＿＿＿＿＿＿＿が静岡大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻を受験し、派遣が決定した場合、スクールリーダー＊1としての力量を高め、同時に学校改善に寄与する目的で、教職大学院における実習科目＊2において、「学校等改善支援研究員」＊3として教育委員会が認める学校（現任校を含む）等において実習を行うことを承諾いたします。

＊１　スクールリーダーとは「学校単位や地域単位の教員組織・集団の中で、中核的・指導的な役割を果たすことが期待される教員」（平成１８年７月中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」）を意味します。

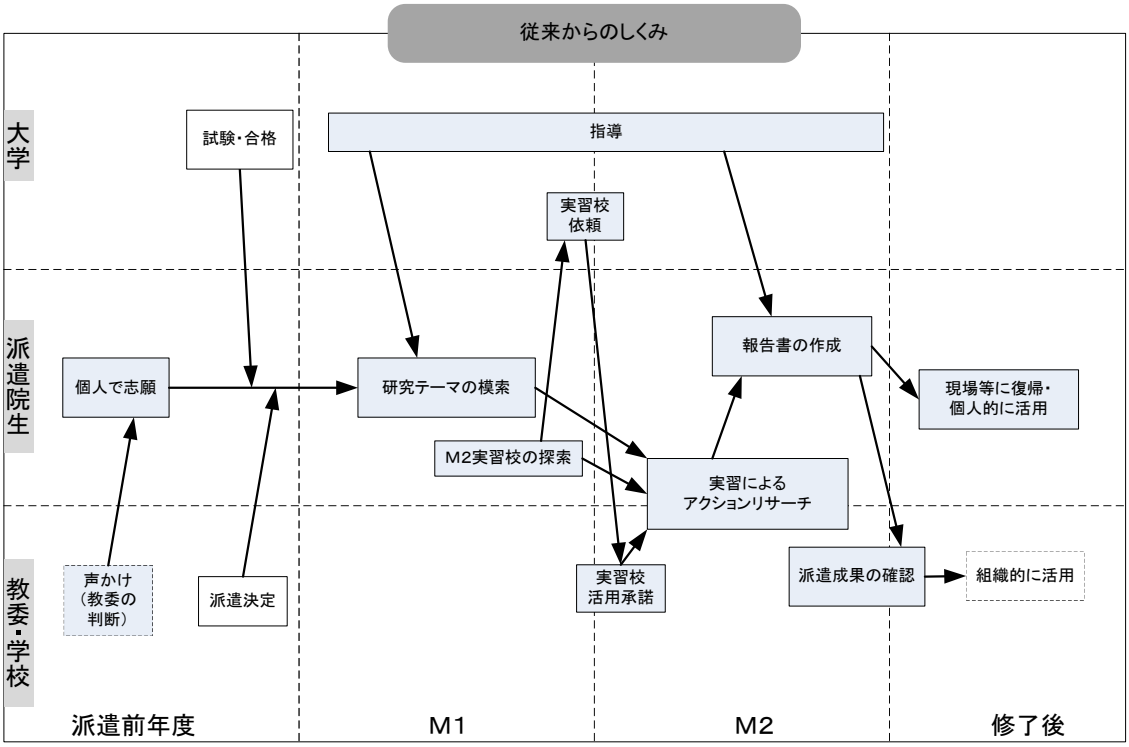
＊２　教職大学院では実践的力量を高める目的で、修了のために原則計 300 時間以上の実習が必要になります。具体的な実習校や実習内容については入学後、教育委員会と相談の上、諸条件を総合的に検討した上で決定されます。

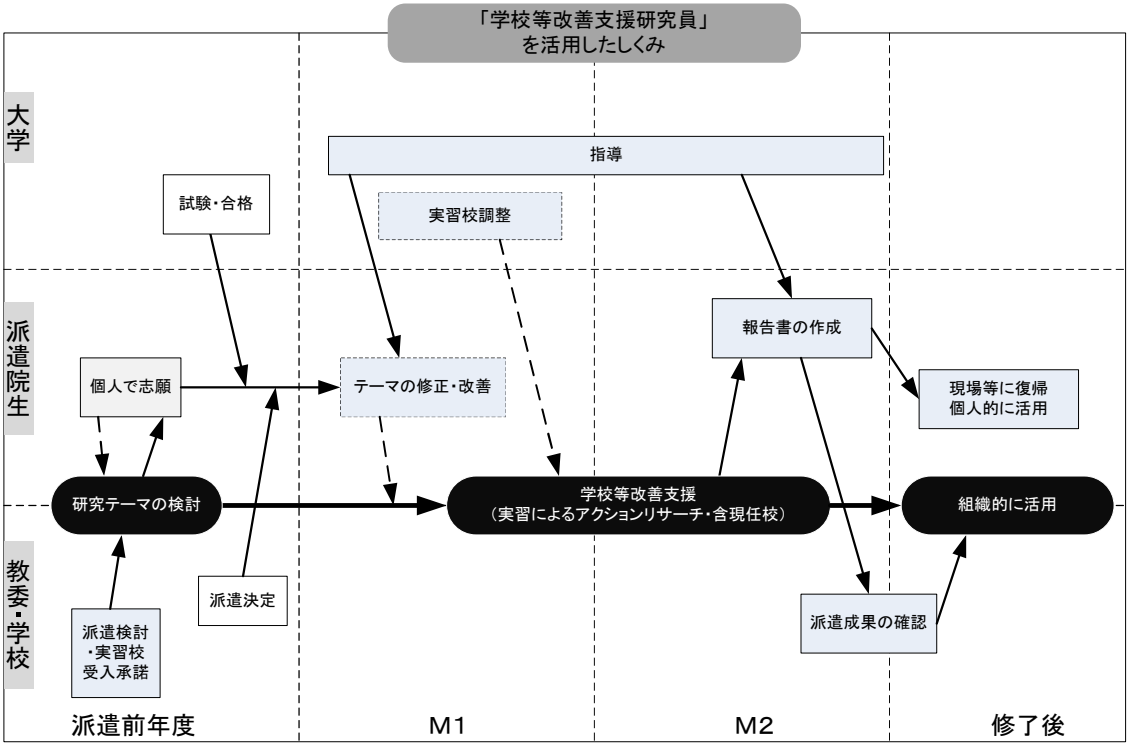
＊３　「学校等改善支援研究員」とは、教職大学院での実習が学校改善に実質的に寄与することを前提に、静岡大学と静岡県・静岡市・浜松市の３教育委員会の申し合わせの上で使われている呼称であり、特定の職位や校務分掌上の位置づけを意味するものではありません。

(1) 教育委員会の長期的人事戦略のもと、施策の力点と連動させて現職教員の大学院派遣を計画することができる。
(2) 大学院在学中の大学院生による学校支援のかたちをより明確化でき、派遣を介して大学と教育委員会が協働して学校現場の課題に取り組むことができる。
(3) より長期にわたる実習が可能となり、同時に実習科目において現職院生が補助教員的に活用されること（いわゆる薄め）を防止することができる。
(4) 大学院研修の内容を、教員の個人的力量の向上支援から、自治体の教育の抱える組織的な問題解決へとシフトすることが可能となる。

上記の趣旨を踏まえ、このしくみは平成 29 年度入学生より導入される予定です。

「学校等改善支援研究員」を活用した大学院研修のイメージ





教職大学院を活用した学校改善事例集

国立大学法人静岡大学・大学院教育学研究科
教育実践高度化専攻・学校組織開発領域

執筆者
山﨑保寿・三ッ谷三善・武井敦史・島田桂吾・
渋江かさね・山口久芳・古山浩志・高塚和弘・
法月良輔・本荘文康・水田忍美

平成 28 年 2 月 24 日版